

①

夏のスタンプ

雲にはペンナイフを投げ  
海には黒船を浮べるなど  
あのを忘れた蟹は  
磯のヒルネを青空に告げる  
赤いパイプに赤いマツチ  
赤いエナメルの爪から  
蟹のロマンが  
海泡に光り  
ひとりぼつちの蟹のおめざめ  
冷たいスワブをすゝつたりした  
化粧した目玉に  
アクビがひそみ  
オゾンを吸ふね  
ガラスのない水族館  
インクのあるカンバス  
夏はアルバムを残してから  
海を去つたよ

日

高

貌

二

## ② 夢の受胎

井 根 哲 雄

あの闇に裸のまま煙草の人が軟々といのり、不思議な鎖の時間が放たれた。

岩上にペタルを軋らせ燃え續ける年齢を胸に嘖む。

苦ければ人生の雲に化け、星宿の頭飾りをゲンゲ晶の花環に捧げ、道化た、あゝ戀人よ。

世界に匂ひ所詮は地球の憤怒にすぎぬものか噴水塔は孤獨の觸手を植物の女性に自信をしめし空の因縁に執拗なねばりて牛蝸の如く葉脈を腹這ひ現實の氣配を燃やしてゐる。油燈を持って！

宿世の灯に息吹く歴史を記憶する體臭。

呼吸する衣服の生命に且ての創造を、疲勞せぬ限り一把の煉瓦を散け。

女性の兩足に遊び驟雨の様に呼吸する、脈搏、收北せる存在。

あの睡眠が萬象を流し融けて行く遺跡に愚かなモラルを打診し炸裂する火花を、おゝ、こゝでは純粹な眞理を忘れてゐる。

あの雲が筋肉時代の石膏である造花なのか。夢も記憶しない。

神の印し忘れた莫迦の青年。

君等の爲に動物の夥しい血滴をなめづらう。

腰に傾いた季節の片膚を周到な掌に盛り嘲笑にも似た表情の誕生に何等の嬉こびも沈下した土塊の一片にすぎぬ。

汚穢だらけな意識の都市に煙草が流れ爆發し灯に吹きまくる風雨の匂こそ開放された貝殻の學校氏よ。

海砂の美しい生命が逢へる悦びの事に香氣の無い絶叫を感じる。

笹が鳴る、野火が燃え海なりが駆けめぐる。太陽は息絶えて深らな引金をもてあそび氾濫された河を嘔み殺すのか。

花は開き恍惚の波が揺れる。

觸れ觸れて觸れる。

白い乳房の貝殻に聞えるコクトオの咳。

濡れをぼれる墓標に氷河はひたひたとおしよせ漕がない紙舟が弾丸の様に距離を落して行く、昆蟲のスパアが想像せるモノクルをかゝげ紙風船の贈答を打電し依然とした液體の武裝に喝采を火花する頬が芽生える季節の信望をまとい絶叫の青年論に無知の魚群が太鼓をこんごん然し透明な監視を續け鏡柵などで玩具をしゃぼり苦惱の陰落を肉體が蹴り上つた空間に果實の崩かれた断片を、あのしほれた花々の石礫に打て。

夢に流れ夢を流れて距離の無い。

③ 樂器の世界

☆

鮎川信夫

ガラス窓から白い手たちが  
侵入してきて樂譜を散らかした  
頭の大きな樂器が目覺めたらしい  
つまんなさうにポツンと鳴つてから  
手を當てて耳のネジを検査してゐるのを  
物ぐさな樂器たちはねころんで  
チロリチロリ眺めてゐるうちに  
ヴァイオリンがセロの聲で歌つたら  
セロが憤慨して足をあげた  
みんなポカンと口をあいてゐると  
うすい陽の光が胃の腑へさしこんでくる  
つまりその隙にといふわけさ  
團扇みたいなシュロの葉の下で  
二つの樂器が揃つて火を呼び始めてね  
けれど燃えないうちに水がはいつたよ  
するとピッコロが不服を唱へた

パイプオルガンも大變不滿らしい  
エロスよエロスよと騒いでゐると  
自然にオルケストラが編制されたね  
樂譜が走つてきて整列する  
おやおや狂氣がくるわいと  
口の悪い家畜どもが逃けていつたあとで  
花のある音樂につれて  
樹の海に青いぎんの雨が降つたよ  
貧血がくると一つつつ樂器は床に倒れた  
おお主よと叫んだかは考へてみたらいい  
眠れよ眠れと聲がしてゐる  
樂器のうち暗い腹の中に沈黙が  
頭髮を伸ばしてゐるのを知らんかね  
樂譜はヒラヒラ羽を生やして  
室内を飛びはじめ

4

BOHEMIAN CHANSON

☆

松村文雄

蒼い月

登石に新聞紙を

唇に長靴を

樹にぎたあるを

あてませう Powin

★

たとへきみが

せれなあでと

赤い血を嫌つても

猫は

街燈の下に

睡つてゐるよ

ははは

星簇に小便をひつかけ

葡萄棚に哄笑しませう

☆

★

苺が疲れてゐる

雨が繻帯をして通る

少年はらふおるくの詩を

白い自轉車といつしよに

畑に埋める

鼻のあんすびらしおんに

猫が喚くよ

★

髭のあなた

旗は龍束のやうに

泡立つてゐませう

ho-ho-bonsoir

綯帯をして雨は曲っていった

不眠の都会をめぐって

武器を引渡す 武装がゆるぎなくなった 人は愛せ強く生を  
口眠りから世絶えれ/里い夢か/生/て諸君/切の

ドアの外で 新しいガゼを匂わせて雨は再び街角を曲り  
港へ 薄明の港から暗黒の海へ 尾かげなき幻影の世界へ  
唇は濡れた 早がて僕の爪は乾いた きよなら 女は僕と  
すれちがって出ていった ドアの外へ ひとりの背の高い男  
が雨に濡れながら僕を待っている 生きるためにか死ぬため  
にか ドアを隔てて僕は弾丸を装填する  
祝福せよ 孤独な僕らにも敵が現われた 鏡の中で僕の面  
貌は、変する 鳥肌たつ生のフクシヨウ！ ドアの外へ  
不眠都市とその衛星都市 七つの海と巨大な沙漠 夏のペテ  
ルスブルグから冬のバリへ 女は激烈に唄った また愛して  
る まだ愛してる として東京 秋！ 世界は僕の手で組み  
立てられ アンテナの下で夢みている この時 ソナタ形式  
による覚醒の瞬間を 諸君自らに問うがい...あたしは  
願う 死ぬことのない山を 拍手が起りはじめた 僕は椅子か  
ら立ち上る 母さん！

⑥

予感

午後は不意に訪れる。彼は個人として椅子の底に押しこめられる。手はだらりと垂れさがって。世界は翳ってくる。世界の悩みが彼を一個人に追い込む。世界の悲しみが彼の両の眼を抉り出す。その傷口のようにドアがひらかれて。そのまま過去に通じてしまうような気がする。

窓からはぼんやりと彼の生れた街が見える。街には雨が降っている。この二十年間。戦争と戦争との間に雨は地上を濡らしている。街はいくども形を変えた。そして彼の幼年時代の記憶の街はこの街から拒絶されている。かつて母は美しく

祖母もまた現世に生きねばならぬ。過去はドアを無言でぬける。そして未来の一部分につながつてしまう。雨は時間につきあたる。彼の眼前で雨は負傷する。繃帯を！ ありふれた中年の男がありふれた黒い蝙蝠傘をさして過ぎる。

どうしようか。ひらかれたドアをぬけて夥しい手が彼の肩の上に。やや力をこめて冷い唇が彼の唇にかさなる。情熱のない接吻。そして痛ましいことだが彼は心から歓喜を味わう。

きみは俺を殺しに来たのだ。

⑦

# 歌のない歌

(タチ)

この傾斜では

本日はやめて

こわれたオベラグラスで

アラベスク風な雨をどらん

ひととき鳩が白い耳を洗ふと

シガーのやうに雲が降りて来て

ぼくの影を踏みつけてゐる

光のレネスのシヤボンの泡のやうに

静かに古い楽器はなり止む

そして……

隕石の描く半圓形のあたりで

それはスバアクするカアブする

白ひの向ふに花がこぼれる

ほしい硝子壺の中では

ひねくれた愛情のやうに

ぼくがなくなった時刻をかみしめる

ぼくはぼくの歌を忘れてゐる

山  
川  
章



⑧ 初 秋

瞳をふせる

高原のともしび

キリストの苦悶を囁ひ

わたしは遠くを想ふ

トックライトの黄色さに

白樺の林は光り

何故かしら

青いひかりにみちた

夢どもの

タンポリンのむれよ

リボンでむすんだ

フランセエズの郵便箱に

あきぞらは

ころり・ころりと仔犬もたはむれて。

小  
森  
フ  
ク  
子

⑨ 出發

かすかすのインクを涉獵して。  
得たものはなにでもない。

うみ鳴りのきこえる林のなか。  
しろい秋について。

神と論争した。

あるひは。

生きぬいてきた日曆のうへに。

わが事業のすくなさ。

もちろんの手淫。

古代の解にてらし。

思へば。

心地よいいやらしさであつた。

しだらく。

地に烟をあてよう。

中  
桐  
雅  
夫

一九三八年二月四日

10 秋の通信

ヤマの樹の睡眠から

ラテン語の重音が滴る

時計は水盤に沈み

林檎は書齋に否定される

葎笛が歌ふと

風化するヴェニールは

寶石屋に翳びた

氷河の季節風を

トカゲに喰はせると

琥珀の潮はまことに

醒かである

青い山毛榉は

神話的な上衣を脱ぎ

ツイオロンの絃で

刺繍する

白  
石  
豊





告  
白

羽  
生  
豊

換は餘りに  
殘酷でありはした



迷宮ではありはしたが  
室は小さくあり

扉は黄くある

僕の戀人は

笙である筈である

扉である筈である

室は小さくあり

扉は黄くある

僕は戀人の笛口に

好しい聲を與へる

笛口は僕の唇の負擔であると

目のあたりで考へて見る

僕の個人の負擔のみにあらずとは考へるが

僕は野菜の様な好意を

與へずまたのだ

しかし僕の個人は

聲にまたがつて歸つて来る

それは黄い空からボクボクと細い泡が立つ頃と

制限する事は單なる意識でありはしないか

僕の戀人は

タモトを探つてカルナンをばく

それ故に

タモトから會合の如く美くしい鼻紙が出る  
がそれも又意識ではあるが又自由でもある  
僕は立場を抱いた柏の葉の下で

シヤクネンと坐り

愛情で耳に廣い圓を畫く

圓を畫いてから

天地に俯仰はして見るけれど

永遠に奇麗なヒゲは出現しない

ボケットへ手をやつて黄色い意識を引出す

南の空から三人の従姉妹が

神話に似て西へ歩く

従姉は靴を穿つオベケではなく

一枚の無効證書であつた

それが故に

彼等は戀がニンニクの様に下手であつた

戀と證書が單なる自由と意識に終らざる爲

僕が鼻をキョウニかまねばならない。

その後何時も

鳩の羽音の様な笛口のフルニが

僕のヘソにつきあたる

十月十六日 読後

12

青

春

— 我らも試みに過はせず、惡より救ひ出したまへ —

中

結

雅

去

橋は身をちぢめてゐるだらう

はるか左肩に手をかけ

雪降る野へ

思慕の分秒がつづいた

かくかくと膝をつつて

神の折檻にも堪へてきた

しかし

おさへても吐きあがる

はなへの欲情のまへには

攝理といふもののいいかげんさよ

ゆめか

うぐひすが啼きはじめた

アツエ!

\* マタイ福音 第六章

三九・一・二四

13

幸

福

秋  
篠  
子  
子

私の聰明はいつも要領の時間を使用した

微笑はすべて神に通じるものだと

メガネをかけてヨムネを飲み

白日の遺言を一枚の赤のマントに読めた

山のある方と念をろしい虚飾の家で

私の青春はいびつに開花した

すべて精神は昨日の去勢のために

美しくダイナマイトのごとく

考

秘蹟

14

よととへる紅雲引無引無無  
 際縁は黄塵の中に何れを隠した  
 黄塵の中には何れとして  
 若い肥體と若い頭がばらばらに轉つたる  
 若い肥體は若い頭を平然と指し  
 形の若い無風船となる  
 無風船は  
 知性の頭蓋のうしろの内  
 儀達の在りては  
 パンツとつかれる  
 然し無風船は強てはない

紙風船はくたれて  
 在りて  
 無風船の一本がななよななよへ  
 無風船の一本一本をききし  
 在りて手をかざして  
 写す黄塵の中に何れを隠した  
 無風船の一本一本は  
 黄塵の上で  
 泥足り歴史の流に没され  
 白く白く濁りて  
 ひらひらひら飛去  
 無風船は突然と手をまわし  
 ゆるゆると紅雲を閉くのみ

十一月二十八日



15 眠れる水

☆ 鎌田安雄

夜がきたから

わたしはさがしもとめる  
くらがりに夢があると

馳とはいふから

夜の湖ぞこのやうな

奥ふかいところ

夢のともしびの

またたいてゐるところ

夢は泪をたゞへた湖

そこに一枚の繪をのべ

さゞなみに

金とかゞやくものを

眠れる水よ

死せるゆめよ

あなたのなきがらのうへに

けふも煙のやうにたつわたしだらう

16

壁

森  
川  
義  
信

扉や窓を濡し

支柱や車輪を濡し

出ていつた音よ

仄かな調和のどこにも

響きはすてに歸らない

色彩はなく

無表情の翳がうかび

しづかな匂ひがひろがり

脱落するシャツのあとには

あやまらのごとく風が立った

柱廊はなかつり

一もかほく、れ

静りした手曲は

静りした曲曲ととも

いにしゝにうたれた

なびしく速速をかぞへる

時差のそとに

吃立する實體もまた

ひとつの影像である

壊れた通路を水がながれ

扉や支柱の倒れるなかに

その階段はどこへ續いてゐるのか

鈍い光の輪にうつられて

果はみえない

だがその一角は墮ちた

深い空間をまたき

おびたらしい車輪は戻つてきた

そしておまへの道を走つてゐる

放らつた圓心に

鋼轉するおまへの聲がきこえる

おまへとは誰か

強烈に踏みにじられた地域に

いつはりのごとく風が立ち

振動だけが支へてゐる

眼も肩もな

幻の街よ

かぞへきれない壁や腕椅子は

悲痛によごれ

水平のなま洗なでいつただらら

貴夫人のやうに飾られ  
 た貴夫人のやうに憂愁にみちて  
 寶石を噛みくだき  
 吹雪すざぶ落葉を重ねて  
 音もなく沈んでいつた  
 堆積する流れの底に  
 絶間なく幻が走り  
 匂のない花が投影される  
 すべては白紙で包まれて固く

壁の中に塗りこめられてゐるかのやうに  
 光世に髪を濡らすために  
 静寂の床の上を  
 亡霊に憑かれた長い影が歩いてゆく  
 日々いきものやうに息する擴りに疲れ  
 崩れてゆく地平の果に  
 そこで培はれるものは  
 いくすぢもいくすぢも  
 あのきんいろの網でもあらうか  
 いろのない色をして  
 傷よかい足跡だけを遺し  
 流れてゆくものを

岡  
 村  
 眞  
 幸

(18)

形

相

魚  
川

一本の莖は清浄な水を欲する

1

だが白いものは

いまきびたらしい影のなかでもがく

上品な身のうしろで

怪奇な嘴き

そして眞珠のやうに紅りながら

寒い廊下をわたつてきた

光澤とともに

盲目はドアの隙間から入ってくる

眼はくらみ

殺氣だけが風の如く起ち上り

一個の器物と共にすべてが放擲された

歪みや

空虚な核が

小さな宇宙の平面の上に残された

花のほとりに水を

青い皿のあたりに葉脈を

具足は視界の外ではない

あのひびきは何か

あれは日後ととるに

おまへをとりまく五つのドアである

1. 30, 1940

わたしの言ふことは變である

怪物の言ふことは身にまづてくる

わたくしはカリタスに足をかけ

思想を消してかんがへる

ミルクのほひ

ミルクのぬくみ

驟雨のやうに

陽が照つてくる

そんな分秒

荒野に呪はれた橄欖を抜き

あをい無音の樹のした

その静謐にひたり

思想を消してかんがへる

橋が消えてゆく

それでも河はながれ

河に沿つてゆけば

海にひらがる

それをほんやり見てゐるのだらうか

精の下着のやうな

眼にみえないひかりたち ひかりたち

そのなかをくぐつて

育つたひとがゐればな心と言ふだらう

橋は消えてゆく

ひとびとは泣く

聲をあげないで壁んでゐる

わたしの言ふことは變である

怪物の言ふことは身にまづてくる

珠をいただき

空を愛しんだことが多い

コロセウムのうへの

かがやくあの瓦は知つてゐる

すべての希みを奪まへにかけ

怪物の言ふことは身にままつてくる  
わたしの言ふことは變である  
徒らに汝の首べを垂れよ  
盃を捧いで  
もはや乾盃も益ない

號泣だけが限りなくまたえに續いてゐる

橋はみえず

星も雲も出ない

月も出ない

白百合のすがたもなくなつたり

いや

花癡だけがのこる

何もなくなつて

あゝ  
神々が笑つてゐる  
それから土地が溶解してゆく



もしわれにカリクアスなくば何の益かあらん  
わが身を捧げて火刑にあはんとも

われすべての財を貧者に與へ

號泣の聲をひびかせてゐる

ひくひく

そのうへに白百合の花が立ちつくし

書翰ははらばらに頽れ

隨天使は息たえてゆくだらう  
臭氣はうみのなかまでひろがり

メアの肩がろろちる燃えはじめ

石が割れる

あゝ  
からだのまはりが腐蝕してくる  
軟骨が露出してくる  
やがて  
空氣がしろく凍つたまま  
爪はぬけてゆき  
水滴が落ちてくる

うつしく死んでいつたなん萬のにんげん

20  
糧

三 好 豊 一 郎

疲れた衣服をとりまく把手のない箆笥

夢にさへ泉のさゝやきは遠く

わたしの闇をちぢめる風に建物の秩序が

一瞬薄れる

この象徴の團欒は乾いてゐる

塵が積る あゝ

みにくい投影が安住する

草のあたりに青空はないか

一点は見失はれ

欲するものは雲の上で翼を濡らすまゝに

眼は植物の海に迷ふ

その方角からしたゝるインタの音

腕の上に腕と……

剃刀の上に花と……

わたしの内側をのぞくがよい

わたしの肩の息吹に耳を澄ますがよい

おまへはうばはれてもまだ涙を失はぬ水である

人々はわたしは告げよう

盲ひた歌の鳴るところ

約束も光も

その歌のひびきのなかに。

21  
徑 路

日 高 貌 二

光の形態は角度を失つた

もはや一様な虚構が

わけもなく散在する

朝のために



23 よどみ

流れにつかり  
流れにおされて  
流れ行くもの  
ぬれて立つまゝに  
舞踏のカタスは消えて  
信仰の一切は  
忘却のよどみにくだかれた

さて  
とりすがりとりついで  
生滅する魔法に  
酔つてはみたものよ  
のらはれた白き胸手からは  
空虚な字エスチヤキが生れるのみだつた

関保義

涙もて  
打撃かれた背の眞珠を  
さかし来む  
流れにつかり  
流りにかされて  
流れ行くもの

果てしなく深く  
果てしないどん底には  
既に  
消滅した祈禱さへも  
つぶやかれない  
すべては  
白紙のよどみに  
固くときされ  
形体のない彫像に向つて  
不滅の影を意識しない  
意識を以て  
一様に歩行を続け

空虚な部屋である  
恐るべき部屋である  
一本の葦もなく  
うたれた椅子と椅子と  
新しい流體は  
動かうともしない

それはかつての方向であつた  
美しき質屋よ  
白い葦よ  
一つの線に沿つて流れ  
かすかな静謐が  
樹々のために

ひなしく芽生えた  
睡眠に近い意味は  
光ることすらない  
あなたの指を折り  
崩れさうな回柱を透して  
花粉のやうに飄つてくる

影が重りあふ  
靨れた人のほとりに  
ひなしく芽生えた  
睡眠に近い意味は  
光ることすらない  
あなたの指を折り  
崩れさうな回柱を透して  
花粉のやうに飄つてくる

22 時間の姿勢

佐藤英哉

靜かに泡立つ肌離は  
一枚の記憶に交へられ  
足のなげ樂舞などは  
このやうに遠へる時間に  
すぐさま溶解するが  
影が重りあふ

佐藤英哉

24

夜

小野 一雄

いつから此處に佇つてゐたのだらうか 肉体に映る湖  
は枯れてしまつたけれど 薊のうへにひろがる夕闇の軋  
りは またしても血管を這ひ寄つてくる 見給へ 白い  
傷口を月に濡らし 葦の葉みを踏みわけてゆくあの影は  
もはや わたしとは何の關りもないのだ

蒼黒い山嶺を超えて挽歌が聞えてくる あれは根簇の  
さざめきであらうか 傾いた感徳の掌に耳ふたぎ 露る  
いのちの背後に なほも賑やかに 麥畑の風に送られて  
響くあの聲々は 骨を鳴らし 觸手を碎き ふたゝび空  
に歸つてゆくのだらう

殺戮に美しく飾られ やがて夜は刻々にふくらんでゆ  
く すでにわたしを離れていつた影け空間の外にもない  
のだ あゝいまこそ 殘された肉林の中で ひたぶるに  
眠りを偷む魂を揺りおこし 荒々しい漿の果のおそこま  
で 咽喉を裂くわたしの叫びを 血と共に吐かねばなら

11.6.1940

クラブ通信

☆ クラブ員住所變更と未發表の分は左記  
白石 豊 杉並區阿佐谷一ノ三六 阿佐谷ハウス  
三輪 孝 仁 同 三ノ五三〇  
川野 友 善 澁谷區松濤町一 加賀見方  
茂木 徳 重 下谷區中眞馬町一ノ二 昭和寮  
前田 純 敬 日本橋區綱菱町二、九 鈴木方  
日高 親 二 堺市出島濱通十七番地 橋本方  
森川 義 信 香川縣三豊郡栗井村  
疋田 寛 吉 日本橋區大傳馬町一ノ一 竹内方  
☆25輯は八月五日に締切つて、印刷中です。これか  
らだんだんスムースになるでせう

25

樹木抄

中 桐 雅 夫

蜘蛛は樹をしほり  
 うつくしい液体をのんでゐる  
 樹のいちばん高いところ  
 狂風の葉をまもつて  
 叫んでゐるのは誰か  
 空耳かもしれぬと  
 岡丁はぼんやり考へこんでゐた  
 お僕の隣席のなかに  
 血は流れてゐない  
 軽だぼまんなかから折れてしまふ  
 鏡は鏡のなかにそれをかた  
 推は赤いのか 青くないのか  
 風は冷たいのか 冷たくないのか  
 尖はれてゆくのは  
 光といふものであらう  
 なにも知らない子供のやうに  
 僕は足踏みをしてゐる  
 れもんの樹のしたで  
 れもんの樹のしたで  
 れもんの樹のしたで  
 散つてゆく葉は  
 燕の背にのつて  
 さうだ  
 れもんをたぐると涙ぐむと思ふ  
 僕はパイプを吸つてゐる  
 樹をとりまいてしまふ  
 紙幣を網をつくつて  
 幼態を脈はしい蜘蛛が  
 僕の咽喉は潤れはじめ  
 周囲が黄色くなつてくると  
 れもんの樹のしたで 雲をみた

26

逆 轉

柳 越 秀 夫

今宵  
 眼を閉するすべも知らないで  
 肩かた距離への  
 無数の足跡を刻まうと  
 言ふのか  
 意識の醜態と肌寒き  
 一滴の雫とが爛らす  
 隠時の安易は岸邊にそつて  
 私達は見るであらう  
 奇妙な哀歌に類寄せて  
 凝固の流れを  
 漕いで行く人々を  
 それらの捧る不可解な合唱と

兄とさる米に揃つられた  
 魂の亡骸と  
 生きてゐる肉體とで  
 いたづらに近づき難い  
 優越の一群を否定して  
 何處の果てにマチーフを  
 何處の流れに取巻を  
 移さうとするのだらう

日毎  
 果處に向つて  
 掘上げる最後の斧が  
 全てへ形造つて行く紋章は  
 あの身も切られるやうな  
 笹笛の殘酷な字守唄にも  
 まして暗い

27

形相

鮎川 信夫

そのつぶらな瞳をあげよ  
 美しい四月五月の花園は  
 疑ひもなく咲く乙女の花に充ち  
 あなたの胸の深霧を愛の聲で晴らすだらう  
 あゝ愛に氣兼ねが要るものか  
 世は春だ 憩ひの季節だ。

ドアの外では  
 しづかな炎のむれが  
 物のかたちを壊してゆく  
 地下をなされる水の音は

ほんのわずかに震へる根を支へてゐる  
 そしてドアの内には

秘密の抽斗がある

じぶんを掠めるために

肉體よりも柔軟に

けものや鳥よりもすばやい身仕度で

夜はおそらくどこからでも忍びよる

わずかなドアの隙間から

誰かが

灰いろの遠い空をながめてゐた

まだ光がどこまでもゆきわたり

無限といふものが少しづつ暗くなりかけてゐた

眠つたふりをしてゐると

風だけがやつてきて

黙つて髪を梳けづつてゐる

すべてをみつめる生きものゝ眼が

ランプよりも巨大な思ひ出の下で

また何と小さなことであらう

6.15.1940

サイヨンは死んだ  
貝殻よ  
おまへを愛さう  
だれよりも哀しく  
砂を握り

若々しき諸君

花箱  
光源のなかに  
少女は萌える  
端麗に  
リボンを結び  
白い生理  
かの旅人を殺せ  
樞の匂ひ  
海の匂ひ  
うたじを垂れる  
島のほより

睡眠

28

高玉英一

句ひのないひとよ  
ミモサにもまして  
幸福は来ない  
蒙がのびる  
骨は黒い  
天の聲  
地の聲  
そのまじはり  
忘却される  
われわれ  
虹を渡らう  
消えなまゝに  
ぼくらはわる  
知らなまゝに  
ぼくらはたつ  
Coguilla

泉の變貌

29

明日は戀なき者に戀あれ、明日は戀ある者にも戀おれ——詩人——

白く登えたつ  
大理石の高さも  
さんざめく市場の廣さもない  
この森の庭園には  
ただ煙のやうにつめたい氣體がゆる  
あちらこちらの窪地から  
噴きこぼれては  
根の茂みに水が這ひよる

微風はわたしの肩に觸れる  
あなたは何處に立つてゐるのか  
ゆれてゐる椅子の影は  
樂器よりもつと柔らかにくれる  
けれどなめらかな旋律は  
もはやどんな力も持つてゐないことを知れ  
わたしを敬ふ  
小枝や  
葉脈から  
露が落ちてきて  
しせんに頬がぬれてくる  
それは涙に似てゐたのかも知れない  
あなたは  
泉のまへに膝まづく  
ゆるい流れが髪をほぐす  
水の底にはいつも鏡のやうな階段があつて  
愛も

わたしは象とられた世界から這りでて  
縁の油の方へ近づいてゆく  
とねりこの木に凭れ  
悪言のやうなものを  
じぶんの耳で聞いてゐる  
書籍をなげうつて  
考へただけでうつとりするのは  
哀れなことにちかひなげと思ふ

戀ひも  
みんなそこに  
悪かれたかたも眠つてゐる

わたしは一體何處に立つてゐるのか  
小さな場所に  
もつと小さな愛を  
あなたの微笑はほとんと殘酷にちかひ  
奪ふものを  
奪はれて  
わたしの骨は洞れてゆき  
したいに眼をどちだ情願の石に變つてしまふ  
狂氣ならは  
遠い街へ走り去るか  
夢をみたり  
まどろんだりしたのは  
あなたの果しない醫のなかで愛つたのか  
暗い空の下に現れては

奪ふものを  
奪はれて  
わたしの骨は洞れてゆき

『詩集』 (昭15・11)

船 川 信

ガラスの底が晴れたら

高い木の頂まで攀ちてみたいとひそかに思ふ  
わたしはいつか鳥になるのかもしれない

一定の時刻と

一定の雰圍氣のなかでしか

探へることのない職たちよ

みんなわたしの言ふことを信じてないか

スマインとスマイン

さうだ雨の降る日に

死者をして死者を葬らしめよ

永遠よりみじかい時間のうちに

柱も扉も腐蝕してゆく

地の果の年後の淮には

煙めく木片が彼に漂つておよろ

亡靈たちの影の外に

わたしは何の関りもなく立つてゐる

離れることは許されない

泉上返せ

太陽と

愛の生誕の日を

すべてはもはや過ぎ去つてしまつたといふ

悪魔よ致へてくれ

滅びに至る門と

ナルシスの末路を

むかしの壁もとどかない

木と木の間の寒い廊下に佇んで

わたしははじめて「祭り」といふものを見た

いとしい樹木も逃げはしない

鎖で縛られてゐるのはいいことだ

ここはわたしの生れた土地だ

手がかける

測りしれない地平線のむかふから

あなたの抱んだ聲がする

しばらくは

バイアの煙にのつて

焼けてしまつた昔のあたりを散歩する

やはり座の色は

淋しいものに違ひない

かつて地上に祭があつたといふ

あなたも

日液になると

西方の窓を照らしたす

美しい火災の意味を知らたらう

秘密の抽斗をしめ

ああ呪はれてもよい

明日はすでに落ちてゐるたらう

白い墳墓の方へ

落ちていつた眼は何と呼ぶのだらう

暗黒のなかで

ランプのやうに

あなたの沙汰は油の匂がする

誰が道に迷ふといふのか

死の谷間が深いやうに

月は透かなる湖にかかる

空が白む

波が黒い樹かげに光る

そして誰が沈黙したといふのか

勾配にたつて

わたしはいつか顔を見るかもしれない

葡萄酒の汁は

眠りをもたらし

また笛の音を喚び

静かに愁ひをなぐさめてくれる

だがわたしはあいつらを許さない

あなたの暗い内側で

眠りを眠つてゐる人たちを

これらの葡萄色の頬を打て

むしろあなたの占めてゐる空間に

風が吹き

小さな炎が消えてしまふことは望ましい

たとへわたしの位置が崩れ

ひややかな青い噴水も

樹木も濡れてゐる桂廊も

一瞬のうちに

ゼラニウムのやうに燃えはてようと

だがわたしは悔まない

夜にはもつと尊い何かがある

ああ幻か

いくたびか流された血は

もはやこの身にもとらな

いつかはきつと

苦しみは拓かれて

七つの壁が叩きはじめ

あなたのからだから迸る水で

わたしの天は奈落へ崩れおちよう

塵や灰の底へ沈み

化石の街の

乾いた洞窟のなかに

さかんなる風はたち

香ばしいネクターの泉となつて

炎と心の傳説を歌ひ

どんな樹木を育ててゆくのだらう

9.20, 1940



31

獨

樂

樹かげにひとり掬をさだめ たはむれの日がうつく  
鞭もなくそしてソリアの肌もなく

永劫にふれた指の  
かたくなな表情にた便れてゐた  
いつか路にづらなり  
言葉の彫琢につきまはれて  
玻璃のかましい時をあけ  
雲のやうな庭をへばり  
郷愁の傷かぬがまゝに  
うたは遠くなつていつた



湖水にちかひ森の  
清潔な誓のなげられたあたり  
髪を伏せ 遠い肌  
素足のやうな眠りがいとなまされてゐる  
距離がひなしくめぐり  
いくとせか  
樹々が傾ける音い恋に  
影は身をかはかし

30

碑

牧野 虚太郎

窓は肩の上にあつて 遣はせはめられてゐる

もささしの秘色をとほして

海がいつしか影をもとめるとき

影を巻としむなしい人のフォルムとなつて 灘のやうにかさなる

ちいさな獨樂

ふくよかに隣り

うたによせ

あなたはこのまかな地圖をおつめて

じぶんの誕生をつくり

しるい觸手をあらはにかたむけながら

にくたいのやうに動搖をささへてゐる

いつはりのあなたひがとほり

かなしみの植物がとほり

せめてものロマネスクな森みに

たたへられてなげなく

少女のやうにあたへられ

水をもたないスタイルに

その手はのび 音ををしんでさるのであらうか

署名もなく

夜にちかいつるどきから

もはや波もよこらず

あなたの指にかざして

ニシンの戀のかたみにいんどかまねかれてゐた

白亜の立體も  
ひたむきな断面も  
せつない暗さの底へ沈みつつ  
沈みつつ  
霧に埋れ  
影に支へられ

その階段はどこへ果ててゐるのか

はかなさに立ちあがり

いくたび踏んでみたことだらう

煙のある窓ちかく

自ら扉はひらき

そこには立ち去る氣配もなかつた

忘れられた木の椅子のほとりから

衰れな水の匂ひがひろがり

脱落するしやつのあとには

あやまちのごとく風が立つた

あのみしあはせな驚色の時間には  
美しい車輪がしづかに動いて

森

川

義

信

實際のな街  
深い空間をまたぎ  
おびただしい車輪は戻つてきた  
壊れた通路を促へ  
凍えた石畳を  
踏みにじり走つてゐる  
故郷な圓心から閃く  
炎や煙の響きがきこえる  
はげしい振動のなかで  
何を考へようとしたのか  
あやまつておまへは倒れた  
かぞへきれない扉や支柱も  
悲痛によじれ

むしろ眩しい風の方向へ

おまへも街をみてゐたら  
ためらひがちな聲音を待ちながら  
煤けたらむぶもひとつの灯をともし  
そしてやはりらかに燃え  
まづしい家具の傍には  
うつりするやうな記憶があつたと  
いふでは誰が信じ得よう  
倒れる音も 出てゆく音も  
遠い夕とどろきににて躡らないのか  
非かう  
どこかへ行かねばならぬ  
誰もみてゐない街角から

水平のまき沈んでいつただらう

あ　る　か　ん　の　死

33

眠れ　やはらかに青む化粧鏡のまへで  
もはやおまへのために鼓動する音はなく  
あの帽子の尖塔もしぼみ  
煌めく七色の床は消えた  
哀しくたましひの溶けてゆくなかでは  
とび歩く軽い足どりも  
不意に身をひるがへすこともあるまい

に　じ　ん　だ　頬　紅　の　ほ　と　り　か　ら　血　の　いろ　が　失　せ　て  
疲　れ　の　や　ら　に　蓋　ん　だ　ま　ま  
お　ま　へ　は　何　も　語　ら　な　い  
あ　る　か　ん　よ  
空　し　い　喝　采　を　想　ひ　だ　さ　ぬ　が　い　い  
い　つ　ま　で　も　耳　や　肩　に　の　こ　る　も　の　が  
あ　つ　た　だ　ら　う　か  
眠　る　が　い　い  
や　は　ら　か　に　青　む　化　粧　鏡　の　な　か　に  
死　ん　だ　お　ま　へ　の　姿　を  
誰　か　が　ぢ　つ　と　見　て　ゐ　る　だ　ら　う

34

春

雨

地蔵の前で もう一度考へてみた

桃の花が頭の中で咲いてゐたと思つた

藪の中には 坂のところまで死んだと云ふ祖母の體が音がたててゐた

色情だな

地蔵の鼻のあたりが 小さな効果を生んでゐた

梅林を抜けてゆけば 祖母が死んだ坂へ出られると村人は言ふ

青い樹の枝に 鶯が潜んでゐる

死んだ着い祖母も 恐らく それを知つてゐたに違ひないと思ふと 袖を絞つてもみた

矢を放つた

樹が色情のやうに揺れ 夜が坂を下りてきた

青い樹の枝を折り 紅の花よ咲け と呟いてみたが 地蔵は笑ふばかりであつた

その夜

坂のところまで 絹ずれの音を耳にしたが 地蔵のことばかり考へてゐた

LOVE SONG

田村隆

35

傳

説

佐々木章男

昔の村だなと想つた。

樹木のまわりに、いくつかの顔があつた。

顔に沿つて河が流れ、風俗のやうに曲りくねつて海に注いでもゐた。

叢のなかで、陶器や隕石や櫛などがくづれて行く。森は悲しい音楽であつた。

雨が指の間を抜け、さらさらと、銀色の顔をした人々は、傾いて行く森を見つめてゐる。

それは植物に似てゐる。黙つてゐると、花のやうでもあつた。

日光が樹木を濡らす。それは雨であつたのかも知れない。

それでも、水の音が樹木を揺らし、そのたびごとに、いくつかの石像も、鐘の如くふるへた。

河は石像に沿つて曲り、その時、海が見えた。

それから、星がうすれ、すべてのものを載せたまま、土地が沈んで行つた。

(片尾 獅)

ひとを送る歌

36

井 手 則 雄

美しい日和は つか  
訪れてくれるだらうか  
プラタムに陽傘を憩はせ  
虹を待った数日が懐しい  
けれど お前は忘れたのか  
七色の殿堂が空に展ぐ前に  
笹つく雨のひとときがあつたことを

プラタムは打つ音を鳴らし

陽傘はぐつしよりと

濡れてしまった

くつしよりと陽傘はるはや

お前の意志だけではひらかない

お前は陽傘の布をかまぐり

鋼鉄のその骨をとつて

木蔭を出る

雨と戦ひ つかこの村に

美しい日和を齎すために

美しい日和よ

あなたはいつか

訪れてくれるだらうか



堪へねば このひとときを 堪へねば

それは當り前のことだけれど

プラターヌが虹を創るのではない

虹が架つたときにプラターヌが光るのだ

その時刻がくると

澤山の樹木の合間から

乾いた陽傘はタンポポの種子たねさながら

無数に昇天するのだと

誰かひとあつて

お前のいとしい嬰兒みどりごに

言ひてやるものはあるのか

37

神

々

鮎川信夫

御ふもの考へるもの

また烈しく運動するもの

神々よ あなたの姿勢は萬別なれど、

歸するところ一にして 祈りは慈き慣習マヨヒの光明なり。

鳥瞰すれば山河

仰げば星屋の静かな明け暮れ

食なく衣服もなく、

高い處に住む神々よ。

御身は知つてゐる、世の輝かしい變貌を、新しい種子が新しい土地に播かれつつあることを。

御身は教へる、肉ニクの裔なるものたちに、

「美しき質を結ぶ悪しき樹はなし。」

戦ひは何處よりか

熱い太陽を背負ふ 神々よ

あなたの渴望が、

大いなる真晝の泉にいそぐからた。

耐へねば……

あなたの齡にとつてただの一瞬を。

泉に立つ影

38

関 保 義

ひたひたと波打つ泉を信じ

ともすれば美しい涙にいだかれて

いつまでも立ちつくしてゐる

飲みほされた盞をあげ

月影を蝕む妖精をみつめるやうに

蒼白な光の下しづかに

かよわき人のねむりがいとなまれてゐる

生きながらにして死を呼吸し

幽霊の空しい生活を送るおろかな人よ

あれは傷ついた古き石碑

その神秘的な誓を守り

盲ひた愛情を信じながら

神々の招きをのぞんでゐる

泉にうつる虹をたたく

かたくなな風の奴をたたく

なほもみつめるやうに

わたしはいつまでも立ちつくしてゐる

39

橋上の人

①「橋上の人」第一作（初出「故園」第三号（昭18・5）底本：『橋上の人』（昭38・3思潮社）\*「故園」本文確  
認不能のため）

高い欄干に肘をつき

澄みたる空に影をもつ 橋上の人よ

啼泣する樹木や

石で作られた涯しない屋根の町の

ほるか足下を潜りぬける黒い水の流れ

あなたはまことに感じてゐるのか

澱んだ鈍い時間をかきわけ

權で虚を打ちながら 必死に進む袖の方位を

花火をみてゐる橋上の人よ

豆田

405

熱い額の 橋上の人よ  
 あなたはけむれる一個の霧となり  
 あなたの生をめぐる足跡の消えゆくを確め  
 あなたは日の昏れ 何を考へる  
 背中を行き来する千の歩みも  
 忘却の階段に足をかけ  
 濁れる水の地下のうねりに耳を傾けつ  
 同じ木の手摺につかまり 同じ迷宮の方向へ降りてゆく

夢みる橋上の人よ  
 この泥に塗れた水脈もいつかは  
 雷とともに海へ出て 空にたつらなる水平線をはしり  
 この橋も海中に漂ひ去つて 躍りたつ青い形象となり  
 自然の声をあげる日がくるだらうか

濁いたところの橋上の人よ  
 眠れる波のしづかな照応のなかに  
 父や母 また友の顔もゆらめいてゐる  
 この滑らかな洞よりも さらに低い管みがあるだらうか  
 たとへ純粹な緑が 墳墓の丘より呼びかけようと  
 水の表情は動かうともすまい

あなたはみづからの心象を鳥瞰するため  
 いまはしい壁や びなしい紙きれにまたたく嘆息をすて  
 とほく橋の上へやつてきた  
 人工に疲れた鳥を  
 もとの薄暗い樹の枝に追ひかへし  
 あなたはとほい橋の上で 白屋の花火を仰いでゐる

また午後の廊下の如くあなたの躰を影にするだらう  
 どうしていままで忘れてゐたのか  
 あなた自身が小さな一つの部屋であることを  
 此処と彼処 それも一つの幻影に過ぎぬことを  
 橋上の人よ 美の終局には  
 方位はなかつた 花火も夢もなかつた  
 風は吹いてもこなかつた  
 群青に支へられ 眼を彼岸へ投げながら  
 あなたはやはり寒いのか  
 橋上の人よ

怒の鎮まりやすい刹那がえらばれて  
 果して肉体だけは癒る用意があるかのやうに  
 うるんだ腫の橋上の人よ  
 日役の空にあなたはわななきつ身を横たへ  
 黒い水のうへを吹く  
 行方の知れぬ風のことばにい つまでも微笑を浮べてあようとは  
 襟褌とした深淵のほとりから離れ  
 ほつそりした川のやうに渝らぬ月日を行くことが出来る  
 しかし橋上の人よ  
 たとへ何処の果へゆかうとも  
 内部を刻む時計の音に 蒼ざめた河のこの沈黙はつきまとひ  
 いくつもの扉のやうに行手をさへぎり

40 耐へがたい二重

鮎川 信夫

『新詩派』昭21・7

深夜 昏が煙草を挟んでゐる  
 とざざれた部屋に心臓の羽搏きが  
 左右に擱ける黒い蔭！ 二重のドヤ！  
 孤獨な生きもののため  
 耳をすましてゐる中樞に  
 つかれた椅子の車音…  
 重たい時計の振子の音…  
 頭上で屋根を刻ぐ不気味な爪の音…  
 頬骨がつめたい空気のなかで突つてくる  
 不圖した思考が  
 うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す  
 鏡かひややかに口岸を覗む  
 私に怖れる  
 古風な銀の縁をつけて いつもこの水が動かぬことを  
 白く愛が底探ぐ埋りついてしまつてゐることを…  
 大きく見ひらいたらつろな眼の  
 おとろへた視力の闇をとほして  
 睡りに姿を現はすこの揺たけの死者は誰だちやう

②「橋上の人」第二作（初出「ルネサンス」第九号（昭23・6））

41 橋上の人

鮎川 信夫

遡んだにふい時間をかきわけ  
覆で虚空を打ちながら必死にすすむ袖の方位を

橋上の人よ

あなたはいまはしい壁や白紙にまたたく消息をすて  
机の凋れた花を

もとの薄明るい草叢になげ  
とほく橋のうへやつてきた

いまになつては少し遅いが  
群衆の喝采には冷笑を感じてゐる

政治や法律をやつたら  
あとでひそかに手を流ふことだと思つたりする

橋上の人よ  
あなたは頭を髪風にお遊だてながら

世界に炸裂する  
白雲の花火を夢みてる

濡いたところの橋上の人よ

資料篇

高い欄干に討ちつき

透みたる空に影をうつ橋上の人よ

汗と油の濡染のうへに

あなたのすぐれた幻の都市が聳えてゐる

湧泣する樹木や

石でつくられた渡しなげ屋根の町の

はるか足下を滑りぬける黒い水の流れ

あなたはまだことに知つてゐるのか



うんだ瞳の橋上の人よ  
 襪蹴につく足跡のやうに  
 あなたはうしろをまひかへらなかつた  
 鏡にくづれるはかない幻影が  
 あなたの宙にかんた道のすてだった

泪を流した船たちの  
 哀れな樺葉よ さようなら  
 羽鳥の繭の  
 死に懸せられた煙火の夜よ さようなら  
 そらはいつの日か消雨となつて  
 あなたは永遠の恋を遺らすだらう  
 橋上の人よ  
 目をひらきあの白い雲を見たまへ  
 淋しい土地の水をもとめ  
 失はれた故郷の名を尋ねて  
 想い町へ山へそして源へと  
 雲の影がひとつ河面を溯つてゆく

唯一瀬の橋上の人よ  
 あなたはけむれる一個の雲となる  
 すると眞昼のなかを  
 自動車のやうなものと  
 動物のやうなものが把握してきて  
 激しく走つたりうごめいたりしはじめる  
 誰かが近寄つてきては  
 眠つてすれちがつていってしまったよ

橋上の人よ  
 この泥に染れた水底もいつかは  
 程寒くともには海へ出て  
 流弊之徒にづらなる水平をほしり  
 この橋もはるかた沖へ漂ひまづつて  
 隅りたつ齊い形衆となり  
 夕陽をかたむけ  
 遠い山のかたちを襲へて  
 自然の聲をあげる日がくるたらうか

ひとつの空清から  
 ひとつの波のたはじれから  
 掬らかなやさしい聲がきこえてくる  
 かつて泉があつた  
 鶴かきぬくちづけよ  
 掬らかな水に映る  
 あなたに生き響しの理の伴信に  
 父母や妹 またあなたの上の女たちには  
 かつて泉があつた  
 眠りからまけたばかりの水は  
 汚れた土地に滴をよちどり  
 活力と滋味を遺へ  
 野を池に變へて地上に溢れ  
 虚無を祈し  
 乾けるもの 固く凝れるものを溶かした  
 われ瀬瀾の世の光なり  
 夜莖 わが涙のみ泣きて琥珀の橋なりきと  
 水仙や蛇や ももろの生ける質を潤はした

放蕩と墮落のはてしなげな行跡をもとめて  
 ゆるやかな遊であなたを橋の體格を羨し  
 いまは遠らな河上はなつた  
 橋上の人よ  
 あなたは誰々だらうか  
 眼下のたいなる泥塊のむかしに  
 かつて泉があつたことを  
 そのやうに沐浴もつたことを  
 白い雲流河面を溯つてゆく  
 淋しい土地の水をもとめ  
 失はれた故郷の名を尋ねて  
 想い町へ山へそして源へと  
 目をとちて流れゆく雲にのつた橋上の人よ  
 防風林や緑の沃野を越え  
 疾走する汽車のうへを飛んで  
 薄羽を瀬上の朝の空にうかがひ  
 あなたは未知の國のさわかたが旅に入る

橋上の人よ、あなたは  
秘蔵にかつた秘蔵や  
嬉しい者のまなざしや

下へ、下へと滑きさつてゆく細の方位を、  
種で虚空を打ちながら、  
見え、隠んだ「時」をかきわり、

はるか、地下を滑りぬける選河の流れ、

石でかためた屋根の街の  
真たい不安と倦怠と  
よくれた幻の都市が響いている。

汗と油の滲透のうへに、  
理みきつた空の橋上の人よ、  
彼方の岸をのぞみながら

1

橋上の人

42

③「橋上の人」第三作（初出：『文学51』昭26・7）底本：『鮎川信夫著作集』第1巻（昭48・8思潮社）

孤獨な橋上の人よ  
どうしていきまで志れてあなたのか

標物とした深淵のほとりから隠れ  
戻つたけりし夕川に滑つて橋らぬ目を行くこと出来る

庭にまたたく光のために  
星のまぎつてゐる者  
さうしてたしかに闇黒は来る  
星のまぎつてゐる者はふりむかぬ  
いつまでも微笑を浮かべて立つてゐる  
あなたは行方知れぬ風の置葉に  
洪水のあとのように離れ  
月夜の憂鬱に身を流めて

橋上の人よ  
同じ迷宮の網のなかへ滑えてゆく

同じ木の手に指につかまり  
首をかしげながらいくたりもいくたりも

もの問ひだけ

あなた自身が測れた一つの距離であることを  
此際と彼國 それも深い橋標にすぎぬことを

だが明日は戀なき者のために  
死と破壊と狂熱が襲撃される日であらう

橋上の人よ 夢の橋上には  
方便はなかつた

花火の夢も曇もなかつた  
自然の聖も流れゆく雲もなかつた

風は抜してあなたに帰やいたりしなかつた

暗くなつた眼のなかに

なほもどけくを望みながら

彼標にぬにも見えなかつた

橋上の人よ



誰も見ていない。  
 鑑死人の行列が手足を纏てしはられて、  
 ぼんやり眼を水面に打けてとめるのを――  
 あなたは見た。  
 悪臭と汚辱のなかから

IV

橋上の人よ  
 まるで通りがかりの人のように  
 あなたは灰色の街のなかに帰ってきた。  
 新しい遠慮の血が、  
 あなたの眼となり、あなたの表情となる「現在」に。  
 橋上の人よ  
 さりげなく履車をおえて  
 あなたは破壊された風景のなかに帰ってきた。  
 新しい希望の血が、  
 あなたの足を停め、あなたに待つことを命ずる「現在」に。  
 橋上の人よ

街角をまがる發音のように  
 あなたはけしきをよりかえらなかつた、  
 風にとぎれるはかなしい幻響が  
 あなたの心にかんた道のすてだつた。  
 橋上の人よ  
 砂浜につく足跡のように  
 あなたはけしきをよりかえらなかつた、  
 液にすれるむなしい幻響が  
 あなたの首にかんた道のすてだつた。  
 橋上の人よ  
 あなたは冒険をもとめる旅人だつた。  
 一九四〇年の秋から一九五〇年の秋まで、  
 あなたの愛音と、あなたの足跡は、  
 いたるところに行きつき、いたるところを過ぎていった。  
 橋上の人よ  
 どうしてあなたは帰ってきたのか  
 出発の時よりも美しくなつて、  
 風に吹かれ、海にうたれる漂泊の旅から  
 どうしてあなたは戻ってきたのか。

誰も知らない。  
 未来の道は過去につき  
 過去は過ぎ去る未来のなかにあること——  
 あなたは知った。  
 あなたがあなた自身であるためには  
 どれだけたくさん人の眼が心の中に入れてあるかを。

「あらゆる行為から  
 一つものを選び出すとき  
 最悪のものを避けてしまふことには  
 いつも個人的なわけがあるのだ  
 だから純潔を汚すことだつて  
 汚したてのシャツをよこすほどにも

「おまえは薄い多孔質の宇宙だ  
 おまえは一アラスに  
 アナス二を加えた存在だ  
 アナス一が生じると  
 アナス二は死でなければならぬ  
 おまえの多孔質の体には  
 生が一ばい詰まっている  
 おまえのからっぽの頭には  
 死が一ばい詰まっている」

誰も聞いていない。  
 この喧嘩の大会の  
 背すじを走る黒い運河の呻きを——  
 あなたは聞いた。  
 水と霧と蒸気と熱湯の地獄の音響に  
 厚くまくれた歯のないう唇をひらき  
 親死人が声もなく天にむかって叫ぶのを……

「今日も太陽が輝いているね  
 電車が走っているね  
 煙草が煙を吐いているね  
 犬は犬のなかで眠っているね  
 やがて星がきらめきはじめるね  
 だけどみんな生きようと書いてはしなかったね」

春ぞめた橋上の人よ、  
 あなたの青銅の額には、濡れた葉の露が垂れ、  
 露ははげしく運河の下から冠濺してくる。  
 夕陽の残照のように、  
 あなたの描せた追憶の痕に、かすかに血のいろが滲み、  
 目波の昏をゆく人影が、  
 ぼんやり近づいてきて、感ってすれ違ひ、  
 同じ露の階段に足をかけ

VI

浄らかな水に映る理想の伴侶に  
 父母や妹 またあなたの至上の友たちに  
 『われ瀾の世の光なり  
 夜屋 わが涙のま注ぎて魂の糧となり  
 水仙や蛇や もろもの生ける質を測おした』  
 あなたは疑うだろうか？  
 眼下の大いなる混沌のむかしに  
 かつて消い泉があつたことを……  
 そのようにまた沐浴もあつたことを……

V

心を極ますことはいないだ  
 教授にとつての探測が  
 聖光輝には濃霧ほどにも見えなかつたりするのだ  
 ガクトのフツチひとつにだつて  
 おきれたギタンの穴にだつて  
 いつも個人的なわけがあるのだ

貴方の深い慈悲と知識とを理解できません。  
わたしはどこまでも感かですから、

大いなる父よ、

父よ、

貴方がわたしに下さったものはこれだけでか。

わたしは病んでいる、

わたしは貧しい、

固いパンを嚙っています。

妻も子もなく、この広い都会の片隅で、

わたしはひとりです。

寂しい父よ、

父よ、

火のなげ煙炬に向いています。

貴方に叛いたわたしは、

寒さに震えながら、

空いた椅子がいつまでも静かに人を待っています。

がらんとした心の部屋で、

貴方がいなくなつてから、

悲しい父よ、

父よ、

Ⅶ

星のきまつている者の、空にまたたく光のために。

夜の狼が冷たくかきさつてる、

そして濡れた髪と青銅の額の上に、

星のきまつている者はよりむこうとしない。

迷いはいかに深いとしても、

霧は濃く、影は深く、

橋上の人よ、

持てる一切のものを失った。

あなたは持たざる一切のものを求めて、

あなたは真理を持たなかつた、

あなたは愛を持たなかつた、

此処と彼処、それらお互ひに距離にすぎぬことを……

あなた自身が見すてられた天上の星であることを……

どうして今まで忘れていたのか、

孤独な橋上の人よ、

同じ蒼穹の白い鵜のなかに稱えてゆく。





おびたらしい灯の窓が、高く夜空をのぼってゆく。

そのひとつひとつが瞬いて、

あなたの内にも、あなたの外にも灯がともり、

死と生の予感におののく魂のように、

そのひとつひとつが瞬いて、

そのひとつひとつが消えかかる、

橋上の人よ。

43

泉 野 沢 野 碓  
はじめての泉

『凶区』昭40-3

フアニイが到着する日 水は処女の静脈をひたすら流れ 未  
 来の壁にあふれた そこは時間のただひとつの出口でもある  
 樹液がしみわたるまで季節の鬱血は続き 寺院は地下整に  
 なつて裸形の大地の内側を這つた 遠い町が麦の穂のかたち  
 でそびえたつとき きみは記憶の運河に掛けられた半透明の  
 吊橋をわたつてきた 河を血で染めるためだ きた フアニイ  
 きみがめざぬにたどりつく日 怪くは植物の集団的営みのな  
 かいた 芝草のつめたいきらぬき 羊齒の本能をぬらす生  
 水は きみの突然の出現に髪色を示しながらも ためらいが  
 ちだその偶然を音と静寂の限界までおしひらげようとした  
 きみのしなやかな掌は無数の水路のなかの 唯一の不可視の  
 水路へ怪くを導き 分水嶺に至る叫びは容赦なく無垢の肉体  
 の水門を破つた 怪くは必死にきみの肌の急流を遡つたが

かがやく液体に浸漬した森や 澄明な樹海のなかでゆれる貝  
 殻の町を見おろすことを フアニイ 視線は仄めかすだろう  
 か 水平線がせりあがつてもまだ空の全貌を映しださないき  
 みの眼が ああフアニイが眼りの水際にたどりつくとき 木  
 陽は分散して薄明の丘陵に措伏し 奇妙な浸透性をあらわに  
 するだろう 均等の肉になかへ 行為の緩和へ向うだろう  
 衰微する午後 向日性の階梯が口をひらき その貧欲な意志  
 何よりもその殺人的な魅惑のために フアニイ きみはど  
 れだけの蹶蹶を代償にするか 快感の風紋が濛い砂丘からし  
 わよつてくるとき 昂奮の渦は夜明けのイメーシを圧縮する  
 時間の果饗は破れ 液体は未来の海でひろがる それもろ  
 あらゆる不意の闖入者をも容れられる巨大な器である フア  
 ニイ 見えないうつアニイ きみの犯罪意図は自立に向う 魔  
 の湾のなかでかがやくきみの巧緻な計画